

二〇二一年度・学力検査問題【国語】
(中学第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはっきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後あつめます。
- 四、問題は10ページで□・□・□の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。

1と5の——線の漢字と同じ漢字をふくむものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 意見をソ^ンチヨウ^ウする。
ア 日程をチヨウ^ウセイ^ウする。
イ 話がチヨウ^ウフク^ウする。
ウ 大地震のゼン^チヨウ^ウ。
エ 山にトウ^チヨウ^ウする。
- 2 絶好のキカイ^ウをのがす。
ア 首相とカイ^ウダン^ウする。
イ 組織をカイ^ウカク^ウする。
ウ 問題のセイ^ウカイ^ウ。
エ 病気がゼン^ウカイ^ウする。
- 3 ケイ^ウキが悪化する。
ア ケイ^ウセイが不利になる。
イ 都市のケイ^ウカン。
ウ 車のモケイ^ウを作る。
エ 円のチヨウ^ウケイ^ウ。
- 4 鬼をタイ^ウジする。
ア 事態にタイ^ウオウ^ウする。
イ タイ^ウボウの新作。
ウ 食欲がゲン^ウタイ^ウする。
エ 選手のコウ^ウタイ^ウ。
- 5 提案をシヨウ^ウチする。
ア 友人をシヨウ^ウタイ^ウする。
イ 芸道にシヨウ^ウジン^ウする。
ウ 馬子にもイ^ウシヨウ^ウ。
エ 郷土芸能をデン^ウシヨウ^ウする。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、省略した部分・表記を改めた部分があります。

心平は背後に足音を感じて振り向いた。英蔵とヒロシとアキラが走ってやってきた。三人は荒い息をはずませて、心平と小百合のそばまでくると走るのをやめた。三人の少年は、腹に一物あるような薄笑いを浮かべていた。心平と小百合は緊張した表情になり、歩調を早めた。

「一匹しか捕れねがったぞ」と英蔵はいった。「どやしてくれるんだ？」心平は黙って歩き続けた。

「心平。お前のおがげだんで。どやしてくれる？」と英蔵はいった。「知らねじゃ」心平はいった。弱々しい声だった。

「知らねじゃでねじゃ、このバガこッ」とアキラが声を荒げた。「うん。責任とれじゃ」とヒロシはいった。

三人の少年は、心平と小百合の行く手をはばんだ。小百合は不安そうに三人の少年たちをみた。

「責任とれじゃ」と英蔵はいった。

「なして、責任とねばねえのさ」心平は消え入りそうな声でいった。「当たり前だべせ」とアキラはいった。「お前が勢い止めば荒したへんで、魚っこ捕れねがったでねが」

「なんも、荒さねじゃ」心平は「I」を失らせていった。

「嘘へるな。ジャッポジャッポ動いたべさ」とヒロシはいった。「そつたらこどねじゃ。荒さねじゃ」

「へんだら、なして魚っこ居ねがったのせ？」とアキラはいった。「知らねじゃ。我の責任でねじゃ……」

「お前の責任だじゃ」ヒロシはいった。「ジャッポジャッポ動き回つたすけだ」

「んだ、責任とれじゃ」アキラはいった。

「責任ってへつたつて……」心平の声は消え入りそうだった。

「魚半分よごせじゃ」と英蔵はいった。

「うん。半分よごせ」アキラはいった。

「へだつて、これ、小百合ほの婆っちゃんさ……」

「そつたらこど知らねじゃ！ 責任とれ」と英蔵はいった。

「へだつて……」

「エー、ちゃん」と小百合はいった。「婆っ、ちゃ」といって首を振った。

「へだつて」と英蔵は小百合を振り向いていった。「おらど権利あるじゃ。心平が、ジャッポジャッポこいで歩いたすけ、魚っこ居なくなつて一匹しか捕れねがったんで。心平ア荒らさねば、もつと捕れだはずだ。へんだすけ、おらど、心平が魚もらう権利あるじゃ」

「バガだな、英蔵」とヒロシはいった。「なんぼ喋つても、小百合ア、なんも聞こえねんで」

「うるへじゃ！ 聞けるじゃ！ 心平の喋るこど分がるでねが！」英蔵は真つ赤になつていった。「我のへつたこども分がるはずだじゃ！」

「これんどア、特別だじゃ」とアキラはいった。「これんどア、ちゃっけえ頃がら、いっつも一緒にいだすけ分がるんだよ」

「うん。これんどア、特別よ」とヒロシは小馬鹿にしていった。「バ

ガこア、バガこどうしでねば分がねのよ。おらどしゃべつたこど分がねのよ」

とたんに、英蔵はものすごい顔でヒロシをにらみつけたが、ふつと言葉をつぐむと、顔を赤くして心平を振り向いた。

「どんでもいいすけ、魚っこ半分よごせじゃ」と英蔵はいった。

英蔵は、心平が手にしている布袋をもぎ取ろうとした。

「分がねじゃ！」と心平はいった。布袋を腕の中に抱いた。

「よごせッ」とアキラはいった。英蔵に加担して心平の布袋に手をかけた。

「分がね！ 婆っちゃんさけるのだ！」心平は身を硬くして布袋を抱きかかえた。

「よごせッ」とヒロシも手を出した。「おらど、もらるにいい権利あるじゃッ」

「分がね！ 分がね！」心平はいった。

「婆っちゃん！ 婆っちゃん！」と小百合は叫んで、もみあっている少年たちの中に入った。

「手え離せ！ 離さねば叩ぐど！」とアキラはいった。

「んだ。ふっ叩ぐど！」とヒロシはいった。

「分がね！ 分がね！」心平は泣き声でいった。

「婆っちゃん！ 婆っちゃん！」小百合も泣き出した。

心平は、どうしても小百合の祖母に魚を分けてやりたかった。これだけ大漁の日はめつたになかった。今度はいつ大漁の日があるかわからないのだ。もみあっているうちに、布袋が破れて、魚の横腹がみえた。ウロコが、暗がりの中で、鈍く光っていた。

「こら！ 何してるぞ！」と声がした。野太い声だった。

「やめろ、この童子ど！」ともう一人の野太い声がした。

小百合と少年たちは、びっくりして声の方を振り向いた。すぐ近くに、下校途中の中学生が二人立っていた。黒い制服の金ボタンがやけに光ってみえた。

「なしたてケンカしてるのセツ」と最初に声をかけた方がいつて近づいた。

英蔵と二人の少年は、心平の布袋から手を離して二、三步後じさりした。心平は布袋を抱きしめたまま、泣き顔を中学生に向けた。

「あれ？ これ心平でねが？」と中学生はいった。「お前、心平だべ？」心平はうなずいた。

「おい、マサル」と中学生は振り向いていった。「この童子よ。この前へった絵つこぼり描いでるバガこは」

「この童子が？」ともう一人の中学生は前へ進み出た。「いつも絵つこぼり描いでるつてへるのあ」

「ほんだよなあ？」と中学生は英蔵たちに同意を求めた。

「うん」と英蔵はいった。「これ、ちゃつけえ時がら、いつも絵つこぼり描いでるすけ、ほがのごどなあんも知らねえんだよ」

「んだ」「バガこだおの、こりゃ」と、アキラとヒロシは小馬鹿にしてⅡで笑った。

「学校でも、絵つこぼり描いでるてが？」と中学生はいった。

「うん。いつもだじゃ」と英蔵が答えた。「こりゃあ、国語の授業の時でも、算数の時でも、いつも絵つこぼり描いでるじゃ。へだすけ、字もろくに読めねし足し算も分がねんで。出来無しよ」

「やめろじゃ！ やめろじゃ！」心平は叫んでつかみかかった。

「うるへじゃ、このバガこあ！」と中学生はいった。

中学生は心平の首ねっこをつかむと、いとも簡単に道端まで放り投げた。心平は三メートルも吹っ飛んで道端の盛土に転がった。道路の拡張工事のための盛土だった。

△ 中 略 △

心平はまた中学生たちに突進していった。英蔵と少年たちはⅣを飲んで心平をみた。中学生に突進していく勇氣が心平にあったことに、驚いていた。すぐに、心平はまたはじき飛ばされた。

「ア——！」小百合は泣きわめいた。

心平はまた立ち上がり、中学生たちに突っ込もうとした。すると、

「オ——！」

叫び声をあげて、英蔵が中学生に突進した。英蔵は頭から突っ込んで、中学生の一人を押し倒した。中学生はどっと地面に倒れ、そのまゝ二人は、猫のケンカのようにもつれ合い、つかみあって転がった。小百合をつかまえていたもう一人の中学生はびっくりして小百合から手を放した。もつれあっている英蔵と中学生の間に入り、英蔵を押さえつけた。二、三発顔を殴った。もう一人の中学生は、ばたつかせている英蔵の足を蹴りあげた。

「童子のくせに、中学生さ向かってくるなんて、生意気だど！」と中学生はいった。

「やめろじゃ！」心平は中学生につかみかかっていた。「やめろじゃ！」

「ア——！」小百合も中学生につかみかかった。

英蔵は勝ち誇ったように小百合をみた。小百合は心平の胸の布袋にしがみついたまま、警戒の眼中で中学生をみていた。

「こりゃあ、絵つこぼり描いでるが、魚つこ捕ってるがどっちがしか知らねえ、ホンツケ無しよ」英蔵はいった。

アキラとヒロシは嘲笑した。中学生たちも笑った。

「へば、そっちの女子は、酒屋の小百合が？」と中学生はいった。「うん。酒屋の小百合だ」とアキラはいった。

△ 中 略 △

「この女子、耳つこ聞こえねがったよな？」と中学生は少年たちに向かった。

「うん」とヒロシはいった。「町の聾学校さ行ってるじゃ」

「耳の中どうなってるんだべが？」と中学生はいった。

「見でみるが」ともう一人はいった。

「うん。どれ、ちよつと見へでみる」と中学生はいった。

中学生は小百合の頭をつかまえた。小百合はⅢをしかめて頭を振った。中学生の手が小百合の頭から離れた。すると、もう一人の中学生が小百合の頭を押さえつけた。

「暴れるなつてば。ちよこつと見るだけじゃ」と中学生はいった。

「ちよこつと黙つてろつてば」ともう一人の中学生はいった。

小百合は、中学生たちの手を振りほどこうとしてもがいた。

「アア——！」小百合は叫んだ。金切り声を張り上げ、頭を激しく振り、手足をばたつかせて断固たる抵抗を示した。心平は顔色を変えた。抱えていた布袋を放り投げると、中学生たちにつかみかかっていた。

二人は泣きじやくりながら中学生たちに向かっていたが、つかみかかるというよりは、しがみついているといった方がよかった。

「この童子！」と、英蔵の足を蹴っていた中学生が、心平と小百合を突き飛ばした。

心平と小百合は簡単に地べたに転がった。それでも、心平と小百合はすぐに起きあがり、中学生たちに立ち向かっていた。アキラとヒロシは突っ立ったままだった。Ⅴがすくんで動けなかった。震えながらみているだけだった。

「こら！」と声がした。迫力のある大きな声だった。「やめれッ、この童子どあ！」

声の主は、自転車に乗った農夫だった。田んぼの様子をみまわった帰りのようだった。

「どこの童子どだ！」と農夫はいった。

中学生たちはあわてて飛びのき、地面からカバンを拾うと、あたふたと川の方へと走り去った。

英蔵は起き上がった。衣服の埃をはいた。しゃくりあげていたが、泣き声は出さなかった。

「ケンカすれば分がねど」と農夫はいった。

心平が泣きじやくった。小百合は顔をくしゃくしゃにして泣いた。

英蔵は口をぎゅつと結んでしゃくりあげた。

「はあ泣くな。早く家さ帰れ」と農夫はいった。それから自転車にまたがって走り去った。

農夫が去っても、三人は泣いていた。殴られたり、突き飛ばされたりして、痛くて泣いているのではなかった。極度の緊張が解けたため

だった。三人は少しずつ落ち着きを取り戻し、やがて、三人一緒に泣きやんだ。

「エー、ちゃん」と小百合はいった。まだ、大粒の涙が大きな瞳にあふれていた。

英蔵は小百合から顔をそむけた。泣いているのをみられたくなかったのだ。

「エー、ちゃん」と小百合はいった。

英蔵は口を結んだまま、無言で服の埃を払った。

「ありがとつて、小百合が」と心平は泣き声でいった。

すると、英蔵はまた、激しくしゃくりあげた。しゃくりあげたけれど、ちつとも悲しそうではなかった。

心平は道から布袋を拾いあげた。布袋の中から、十匹の魚を通して針金を取り出した。

「これ」心平は十匹の魚を英蔵に差し出した。「持つてつていい」

心平は、泣き顔で笑いをつくつて英蔵をみた。

(川上健一『雨罎の川』集英社より)

※1 勢い止め：丸太を組んで川の流れを弱めている場所。

※2 分がね：「だめだ」という方言。

※3 婆っちゃさけるのだ：「お婆ちゃんにあげるんだ」という方言。

※4 聾学校：聴覚に障がいのある児童・生徒が通う学校。

問三 ——— 線2 「バガだな、英蔵」とありますが、このときのヒロシの心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 耳の不自由な小百合に一生懸命話しかけている英蔵の行動を無意味だと思っている。

イ 自分たちの行動が正しいということを小百合に訴えている英蔵の行動を痛々しいと思っている。

ウ 心平に魚釣りで負けたことを認めず小百合にまで言いかけりをつける英蔵を男らしくないと思っている。

エ 心平の言うことしか理解できない小百合に嫉妬している英蔵を情けないと思っている。

問四 ——— 線3 「英蔵はものすごい顔で……心平を振り向いた」とありますが、このときの英蔵の様子を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ヒロシが調子に乗って余計なことを話しはじめたのは仕方ないけれども、そのヒロシに口答えをしようとしているので、心平を黙らせようとしている。

イ 小百合が自分の言葉を分かってくれないしヒロシまで自分を馬鹿にするので腹立たしいが、仲間割れをしている場合ではないので、心平に八つ当たりしようとしている。

ウ 小百合がヒロシからバカ呼ばわりされたのが許せないけれども小百合への好意を気づかれないのでかばうことができず、心平に怒りをぶつけようとしている。

問一 ——— I V にはそれぞれ漢字一字が入ります。その組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア I 鼻 II 顎 III 眉 IV 声 V 足
イ I 目 II 肩 III 口 IV 唾 V 腰
ウ I 顎 II 目 III 額 IV 汗 V 肩
エ I 口 II 鼻 III 顔 IV 息 V 身

問二 ——— 線1 「三人の少年は、腹に一物あるような薄笑いを浮かべていた」について。

(1) 「腹に一物ある」という慣用表現の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不満がつもの。
イ 覚悟をさめる。
ウ 何かをたくらむ。
エ 怒りがおさまらない。

(2) 「三人の少年」の「腹」にある「一物」とは具体的にどのようなことですか。(1)をふまえて、三十字以上三十五字以内で説明しなさい。

エ 小百合が話の通じる心平を頼りにするのは仕方ないことだが、心平がいつも一緒にいるために小百合まで馬鹿にされてしまうので、心平をこらしめようとしている。

問五 ——— 線4 「黒い制服の金ボタンがやけに光ってみえた」とありますが、これはどのようなことを表現していると考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「黒い制服」という表現の「黒」には「何色にも染まらない」という意味が込められていて、魚を奪い取ろうとする中学生たちが英蔵たちの味方でも心平たちの味方でもないことを暗示している。

イ 「金ボタン」という表現の「金」には「正義を貫く」という意味が込められていて、登場した二人の中学生が英蔵たちの言い分を聞いて心平たちをこらしめるということを暗示している。

ウ 「やけに」という表現は「度を越してふつうでないさま」という意味を表していて、中学生たちの登場で救われたと思つた心平たちにより大きな困難が待ち受けていることを暗示している。

エ 「光ってみえた」という表現は「明るいきざしが現れた」という意味を表していて、英蔵たちからも中学生たちからも嫌がらせは続くものの最後には救われるということを暗示している。

問六

——線5「出来無しよ」とありますが、このときの英蔵の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 小百合に危害がおよばないように、中学生たちの関心を心平だけに向けたかと思っている。

イ 小百合の前で心平を馬鹿にすることで、小百合の関心が自分の方に移ってほしいと思っている。

ウ 中学生たちが味方になってくれたことに気をよくして、心平に意地悪をしたいと思っている。

エ 勝ち目のないケンカに挑もうとしている心平を見捨てて、小百合を仲間に入れたかと思っている。

問七 ——線6「抱えていた布袋を放り投げる」とありますが、このときの心平の心情を説明しなさい。

問八 ——線7「エー、ちゃん」とありますが、このときの小百合の心情を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分を助けるために中学生に向かっていった英蔵にお礼を言いたいがいまぐさく表現ができず、もどかしく感じている。

イ 勇敢にも体を張って中学生たちに挑みかかり、自分のことを守ろうとしてくれた英蔵に感謝している。

ウ 中学生たちにいわれのない暴力をふるわれていたところを農夫に助けられ、お互い無事でよかったと安堵している。

エ 初めは意地悪をしていた英蔵がなぜ途中から自分たちの味方になってくれたのか、不思議に思っている。

三

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、省略した部分・表記を改めた部分があります。

考古学の研究手法の中に実験考古学という分野がある。この研究は、土器を作って使ったり、一度掘った穴がどのように埋まっていたのかなど、当時に起こった状況を目の前で再現してみる点に特性がある。一見すると実験考古学とはモノ作りにつながる楽しさを演じているようにも見え、こうした作業に興味をもつ人も多い。

しかし、考古学が本来実験考古学という枠組みとして考えているものは、表向きでは同じに見えても中身はすいぶん異なる部分がある。実はその点が見逃されたまま、看板だけが普及してしまっている部分が多い。

実験とは科学にとって、とても大切な手続きである。

W
X
Y
Z

たとえば、いま考古学の中で実験考古学のテーマといえば、一番先に思い浮かぶのは土器作りである。土器作りは各地の博物館などでは数十年前にわたり好評を博しているイベントの一つである。I、器用か不器用かというのを除けば、だれでも参加しやすく、またできあがったものが持ち帰れるからである。自由奔放に土を練り、自在に粘土を造形していくことは、忘れかけた指先の感覚を呼び起こしてくれるし、想像が形を成すのも面白い。

乾燥させた後の土器焼きは、割れないで焼けるかどうか、一喜一憂

問九

——線8「しゃくりあげたけれど、ちっとも悲しそうではなかった」とありますが、英蔵が「悲しそうではなかった」のはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いが今まで小百合には届いていないかと思ってきたのに、小百合の方から優しく声をかけてくれたので、嬉しく思ったから。

イ ケンカに負けたことが悔しくて仕方がないのに、こんなときまで心平が小百合の言葉を代弁したので、歯がゆいと感じたから。

ウ 自分のせいで小百合が中学生から嫌がらせを受けてしまったので、このまま小百合に嫌われてしまうのではないかと不安だったから。

エ 仲間のアキラやヒロシのふがいなさに比べ、勇敢にも一緒に中学生に立ち向かってくれた心平に、感謝の気持ちでいっぱいだったから。

問十

——線9「持ってついでいい」とありますが、心平がこうに発言した理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が魚を捕りすぎたために小百合にも嫌な思いをさせてしまい、原因をつくった魚などいらないかと思つたから。

イ 初め英蔵とは魚をめぐって争つたが、思いがけず小百合を守ることと心平が通じ合えたような気がしたから。

ウ 農夫に助けられ中学生を追い払えたが、次に英蔵から何をされるか分からないので先に魚を渡そうと思つたから。

エ 何匹魚を捕まえたかにこだわりすぎたせいで英蔵にも痛い思いをさせてしまつて、申しわけがないと思つたから。

であるが、そうした出来事も含めて実に面白いイベントであり、わたしも市民に親しみをもちもらう演出としては最高であると思う。

II、実験考古学とイベントの土器作りとは、一線を画すべき違いがある。それは、実験考古学ではこれらの作業は、仮説を検証する作業であるということだ。極端なことを言えば、土器の文様の描き方や、表面の調整の方法などは、実際の土器の形を作らなくても実験は十分に可能である。また一方で、土器の焼成温度と器体の内部構造の関係を知らうとすれば、完全に焼けた土器を惜しげもなく切断することも必要なのである。言い方をかえれば、III、研究としての楽しみは、土器をまっぴらに切断してから得るものであったりする。そして実験考古学において大切なことは、IV 仮説に合致する結果が得られたとしても、それが唯一の方法であるとは単純には考えずに、さらに同じ結論を支持するような手がかりを積み上げたり、同じ結論をみちびく他の方法がないかどうかを確認することだ。

土器作りの実験考古学をしていた頃、遺跡から出土した土器の構成物を調べて素地土を再現し、それが意図的に粘土や砂や繊維などを混ぜ込んで作られたことを確かめていた。そのときに、偶然、とある博物館の土器製作に関する研究を目にしたことがある。それは、自然の中で粘土や土が混ざったものを使えば、充分に土器を作ることができるという、重要で単純なものであった。

興味深い実験例として参考にしたが、この結論には、決定的で重大な問題が未解決のまま残っていた。それは、実際の縄文土器の粘土の構成物は、地域や時期によって特有の個性をもち、さらには粘土に混ぜ込む砂や繊維などの素材が、同じ地域であっても時間的に変化しているという事実だ。これは決して偶然なことではない。どの地域の土器でも、土器製作が始められた縄文時代のはじめの頃から同じ粘土で

作られたわけではないのである。この事實は、縄文時代の土器製作が地域特有の伝統と技術をもっていたことを暗示している。

5 さきほどの結論は、言い方を換えれば、調合の方法が変化しているという歴史的な事実を証明できていないのである。実験の結論が歴史的な事実と一致しない場合、考古学者が判断する第一の拠り所は、遺物や遺跡である。

考古学は、過去を対象としているが、その時間の厚みは想像を絶する雄大なものである。そして、考古学は過去を、ただ過ぎ去ったこととして乱雑にひとまとめにしてしまわずに、時間の前後関係を丹念に調べ上げて、その時々^{まぢが}に起こった出来事を整列させ、その因果関係を説明するのだ。この手順⁶を一つ間違え^{まぢが}ば、結論が原因におきかわってしまふような大きな間違いさえ犯すことがある。

過去の時間配列の中で起こった土器作りの技術は、現代の陶芸の技術や、わたしたちの身近な経験だけで説明できるような単純なものばかりではなく、多様な変化の過程をとげていて、その一部分が現代の焼き物へと続いていることを知るべきだろう。

仮説のないモノ作りは実演ではあつても実験ではない、というのがわたしの実験考古学の持論であるが、各地で行なわれている多くの土器作りの場面で、こうした取り組みがより多く行なわれたならば、土器は今よりもっと雄弁に歴史を語るに違ひない。

（阿部芳郎『考古学の挑戦』岩波書店より）

問一 〓線A「喜一憂」とありますが、同じように「一〓一〓」という四字熟語を四つ作る時に、必要になる漢字はどれですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。（解答の順序は問いません。）

- カ ア
答 短
キ イ
代 退
ク ウ
長 会
ケ エ
世 語
コ オ
期 進

問五——線1「看板だけが普及してしまっている」とありますが「看板」とは何をたえていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「実験考古学」の本質
イ 「実験考古学」という名称 めいしょう
ウ 「実験考古学」と「考古学」の違い ちが
エ 「実験考古学」と「モノ作り」の関連

問六 ——線2「好評を博している」・3「一線を画する」という慣用表現の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 3
- 一線を画する
- エ ウ イ ア
- すつきり整理できない
- はつきりと区別する
- 互^{たが}いに認め合わない
- 念入りに計画する
- 2
- 好評を博している
- エ ウ イ ア
- 工 注目を集めている
- ウ 名声を得ている
- イ 長く流行している
- ア 期待されている

問七——線4「決定的で重大な問題が未解決のまま残っていた」とありますが、その「問題」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 粘土の構成物が地域によつて本當に特有の個性を持つていたのかということ。
- イ なぜ土器作りのための粘土に砂や纖維などの素材が含まれているのかということ。

問二 線B「過去の時間配列」の「の」と同じ働きをしている「の」を、~~~~線A「オの中からすべて選び、記号で答えなさい。」(解答の順序は問いません。)

- | | |
|---|----------|
| ア | わたしたちの身近 |
| イ | その一部分が |
| ウ | 仮説のない |
| エ | というのが |
| オ | 土器作りの場面で |

問三

W

 $\sim$

Z

 には次の①～④のそれぞれ文が入ります。その順番として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ①　そして実験とは、時として仮説に対して残酷な結論を導くこともある。
- ②　仮説の立て方によつて実験の方法は変わるが、それは当然のことである。
- ③　実験を行なうためには、仮説が必要である。
- ④　仮説とは検証する方法がきちんと準備されていて、また比較する対象が明確であることが重要な条件である。

問四

I

 $\sim$

N

 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-----------|----------|----------|----------|
| ア | Ⅰ Ⅱ とにかく | Ⅱ Ⅲ だから | Ⅲ Ⅳ さらに | Ⅳ Ⅴ まるで |
| イ | Ⅰ Ⅱ なぜなら | Ⅱ Ⅲ しかし | Ⅲ Ⅳ むしろ | Ⅳ Ⅴ たとえ |
| ウ | Ⅰ Ⅱ さしあたり | Ⅱ Ⅲ そして | Ⅲ Ⅳ ところで | Ⅳ Ⅴ おそらく |
| エ | Ⅰ Ⅱ しかも | Ⅱ Ⅲ ところが | Ⅲ Ⅳ かえって | Ⅳ Ⅴ もし |

ウ
粘土ねんどの調査にどのように人の手が加えられてきたのかとい
うこと。

工
縄文時代の人々が土器の製作を始めたのはいつ頃からかということ。

問八——線5「さきほどの結論」とありますが、これはどういうことですか。「うということ」につながるように文中から三十五字でさがし、初めと終わりの三字を抜き出しなさい。

問九 ——— 線6「大きな間違い」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 縄文土器を作る実験をして仮説に合致した結果が得られたならば、同じ結論を導く他の方法など確認する必要はないと思ふこと。
- イ 最初から粘土ねんどなどが混ざっている土を用いることで土器じゅうもんが作れるのだから、縄文時代の人々も同じように土器を作つていたと考えること。
- ウ 時間の前後関係を調べず出来事の因果関係を明らかにできない研究が多いために、縄文土器が歴史的な価値を失うと勘かん違いすること。

問十——線7「こうした取り組み」とありますが、本文全体をふまえて、その内容を説明している部分を文中から十字以内でさがし、抜き出しなさい。